1993.6.21

尼崎市立小園中学校　第1学年　社会科通信

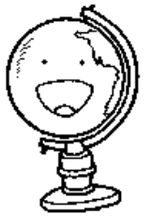
なんでやねん

発行責任者　倉橋　忠

No.3

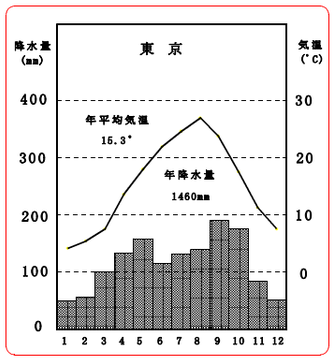
資料活用技能について

社会科で身につけるべき学力は、大きく分けると、社会科学的な見方と社会科学的な考え方の２つに分けることができます。社会科の評価項目の中で、「知識・理解」や「資料活用技能」は社会科学的な見方と密接な関係をもっています。また、「思考・判断」や「意欲・関心・態度」は社会科学的な考え方との関係が深いと先生は理解しています。



人が自然や社会の中で生きていくためには、さまざまなできごとをまず、正確にものごとを見ることができなければなりません。言いかえると、ばくぜんと存在する事実を、客観的に（だれが見ても、だれが実験しても、同じ結果になることを客観的な事実と言います）、理解する方法が必要なのです。その必要性から人類は、数学や自然科学などその他、社会科学など多くの科学を生み出してきました。

そして、社会科学的な思考や判断をするためには、社会の中で起きているさまざまなできごとや現象（社会事象という）を客観的に、しかも、正確に知る必要があります。そこで社会科では、その方法の一つとして、さまざまな資料から提供される情報をもとにして、考え、判断し、事実を理解することをします。



社会科であつかう資料には、「読み物」や写真・図版、あるいは統計資料やグラフなど、さまざまなものがあります。これらの資料がもつ情報を正確に読みとる練習をしたり、ときには資料として提供された情報が正しいものかどうかも考えます。これを観点別評価では、「資料活用技能」という項目でみています。この「資料活用技能」には、合理的で公正な判断をするための基礎力を形成する目的があります。

「意欲・関心・態度」の学力と評価

社会科の評価で言う「意欲・関心・態度」とは、社会科の学習を通じて形成した基本的な学力(「知識・理解」や「資料活用の技能」)をもとにして、形成される発展的な学力であると、先生は理解しています。

たとえば、商店街の花屋さんの店先に並べられている花について考えてみると、理科的には花の品種や、花や茎や葉の構造などや花の成長などが、課題の対象となるでしょう。美術的には「色彩や形」が描く対象であり、国語的には「きれい。うつくしい。かわいい」などと言語で人の感情を表現する対象となり、それぞれの学問的な領域からアプローチ(接近・観察)する角度は変化します。

社会科では、なぜ花が売れるのか。花屋という商売がいつ頃から成り立つようになったのか。花の価格が高いのはいつか、安いのはいつか、それはなぜか？などと、関連しながらも、その他の領域の学問(教科)とは全く異なる課題対象となります。

社会科的な意欲は、花屋の花を見たときに社会科的なとらえかたをしようとする「意欲」であり、「花屋」という「事実」を社会事象として理解しとらえようとする意識の強さと方向であると理解します。それは具体的には、すすんで自分の学習上の疑問点を調査したり、ノートにまとめるというような行動に現れたときに学力としての内容をもつといえます。「関心」は、「花屋」をより具体的に社会科学的な研究対象としてとらえ、たとえば「花の栽培地と販売地の関係」を考えたり、「花屋という商売の歴史」を調査したり、「花という商品の価格の決定要因」を考えようとする意識の傾向であると、先生は考えています。

さらに「態度」は、いわゆる「授業態度」ではありません。社会事象の多くは、たいていの場合、何らかの意志決定あるいは価値判断を要求します。その意志決定や価値判断が、社会科学的に客観的・合理的で、かつ公正な過程を経て導き出すことができるかどうかが大切なのです。「結論」は、評価の対象とはなりません。前提としている事実と「結論」に至る間の論理と事実の指摘が重要なポイントとなります。「花屋」という商売を例にすると、「花屋」の立地条件や社会での役割を考え、栽培地との距離や交通、花の保存にかかる費用などを検討し、さらに今後「花屋」という商売が成り立つのかどうか、あるいは発展するのかどうかを判断し結論を出すというような「課題」に、自分の「結論」を考えなければなりません。そのような「事実」と「結論」の間において思考される方略(方法)が、社会科の評価における「態度」であると、先生は考えています。